

ピアノでバッハを弾く魅力～俊才アンドレア・バッケッティのバッハ

山崎浩太郎

イタリアの若きピアニスト、アンドレア・バッケッティの名を初めて知ったのは、3年前の2011年のことである。

イタリアのダイナミック(DYNAMIC)という小レーベルから発売された、バッハのゴルトベルク変奏曲のCDを、大して期待もせず聴いたのが、そのきっかけだった。

有名なアリアが始まった瞬間から、その軽やかな生命力と甘美な、文字通りドルチェの響きに新鮮な感動をおぼえた。そして聴きおえて、このピアニストの演奏をもっと聴きたいと、ディスクを買いあさる日々が始まったのである。

まもなく、ダイナミックからは同じバッハの、トッカータ集とインヴェンション&シンフォニア集が発売された。さらに探すと、イタリア・テッカからイギリス組曲が出ていたこともわかって、それも手に入れた。

いずれも見事な演奏で、ピアノによるバッハ演奏の歴史に、新たな俊才が登場したことを示していた。これは楽しみと新譜の発売を待ちかねていると、2012年にフランス組曲全曲が発売された。

しかしこれはダイナミックではなく、ソニー・クラシカル・イタリアからの発売だった。バッケッティはレーベルを移り、ソニーでバッハを録音しなおすことになったのである。

国内盤としてはこれが初めてとなるこの2枚組、1枚目の方は「ザ・イタリアン・バッハ」(イタリア様式のバッハ)と題されたもので、イタリアのソニーでの第2弾として、2013年に発売されていたものである。

2枚目は今回の日本盤のために独自に編集されたもので、第1弾のフランス組曲全曲からの第5番とトッカータ、それにバロック時代のイタリアの作曲家たち、ドメニコ・スカッラッティ、ベネデット・マルチェッロ、ガルツピのソナタを収めている。バッケッティはソニーでのバッハ録音と並行して、RCAにイタリアの作曲家たちのソナタを録音するシリーズを進めていて、これまでにケルビーニ、ガルツピ、ベネデット・マルチェッロ、ドメニコ・スカッラッティの作品を1枚ずつ、計4点発売している。そのなかから選んだものだ。

イタリア風のバッハに、イタリアの作曲家たちの作品。ともに、バッケッティの甘美で羽毛のように軽い音色、イタリア人らしい明朗なカンタービレを味わうのに、最適の選曲といえるだろう。この人のピアノの音色は、本当に美しい。それはバッケッティが「イタリアの誇り」と呼ぶ、銘器ファツィオリの美点を、存分に発揮させたものである。歴史的には決して正しくない、ピアノでバッハをひくことの魅力が、ここにつまっている。

この点について、私が2012年に行なったインタビュー（『レコード芸術』2012年12月号掲載）で、バッケッティは——機関銃のような早口で——こんなふうに語ってくれた。

「バッハの時代はチェンバロ、クラヴィコードなどがメインだったわけですが、自分は、鍵盤楽器の発展の流れの到達点にあるピアノを用いています。その広いダイナミズム、ペダル、タッチなど、バロック時代にはなかったものが与えてくれる、最大限の可能性を利用して演奏したいと今は考えているからです。バッハ作品にピアノを用いた過去の演奏家では、たとえばグールド、私はかれを崇拜していますが、チェンバロに近づける方向で演奏しています。私はむしろエトヴィン・フィッシャーやギーゼキング、ホルショフスキなどと同じ、チェンバロの模倣ではない、ピアノ独自の美学による演奏を目指しています。」

チェンバロの模倣ではない、ピアノ独自の美学による演奏。それはこのファツィオリの音を聴くと、なるほどと納得できる。

さらに、なぜバッハにこれほどこだわるのかについても、たずねてみた。

「演奏の解釈にさまざまな方法論がある、可能性がある、ということですね。たとえばショパンなら、人それぞれによって違いはあるにしても、大筋のアプローチはきまっているでしょう。ところがバッハは違う。神がもたらしたかのような、天才的な音楽です。たとえば声楽のための曲を、アカペラで歌って

も、弦楽器で演奏しても鍵盤楽器で演奏してもかまわない。ユニヴァーサルなアプローチが可能なのです。それでも、バッハとしてのオーセンティシティ、權威性が損なわれることはない。こんな音楽は他にまずないでしょう。ショパンで同じことをすれば、何かを失ってしまう。バッハはそうではない。その重要なメッセージは失われない。これがバッハの偉大さです。それに近いのがヘンデル。そしてスカルラッチィや、イタリアの天才たちというところでしょか。」

ユニヴァーサルなアプローチ、多種多様なアプローチの可能性を許容すること。それがバッハの偉大さだというバッケッティは、バッハの同じ曲をアプローチを変えて演奏し、録音することも好んでいる。

たとえば、私がかれの魅力に出会ったゴルトベルク変奏曲。じつはそれは、バッケッティの3種目の演奏となるものだったとあとで知って、驚いたことがある。

ダイナミック盤は2010年のセッション録音なのだが、それ以外にアルトハウスからDVDも出ているのだ。これはその4年前の2006年にヴィチエンツァのトリッシーノ・マルゾット館で収録した映像のDVDと、翌年のサヴォーナのキャブレラ劇場でのCDの、2種のライブ録音からなっている。

「これらはリトルネッロの反復をするかどうかや、全体の解釈の点で、みな異なったものになっています」と本人がいう通り、演奏時間を曲間も含めて

単純に比較すると、ダイナミックのCDが約65分、DVDが約95分、附録CDが約77分と、大幅に異なっている。反復の有無だけでなく、初期の2つはテンポを遅めに、たっぷりと歌わせている。

私は、新しいダイナミック盤の活力と確かな骨格を好むけれども、これもバックケッティにとっては、アプローチの一つにすぎない。ソニーでもまったく新たに録音するそうなので、まもなく登場するそれが、かれの4種目のゴルトベルク変奏曲となるわけだ。

「バッハは黄金の山なんです。とても簡単には登れない。その山に望むのに、毎回同じでは意味がない。毎日アプローチが変わっていく」と語るバックケッティ。わきあがるアイデアとともに、新たに生まれつつあるかれのバッハ。今後も楽しみである。

[2014/03/16]

